

渡独前の思いと現地での実践、帰国してから考えること

前デュッセルドルフ日本人学校教諭

神奈川県横浜市立森の台小学校教諭 池田 綾子

キーワード：在外教育施設派遣、ドイツ、音楽教育、コロナ禍での学校教育

赴任校の概要（2021年4月現在）

学校名・日本語：デュッセルドルフ日本人学校

学校名・現地表記：Japanische Internationale Schule e.V. in Düsseldorf

URL: <http://www.jisd.de/>

1. はじめに

ドイツ西部ノ르트ライン・ヴェストファーレン州の州都であるデュッセルドルフ市。世界中の企業が拠点を置く国際商業都市であるため日本企業も多く、日本人の人口も多い。デュッセルドルフ日本人学校は、今年で50周年を迎える歴史と伝統のある学校である。私が派遣された2018年当初は児童生徒数が500名近く在籍していたが、コロナ禍の影響もあり388名（2021年4月現在）に減少している。

派遣3年目に入る頃、コロナ禍により世界中が大きく混乱し、在外教育施設派遣での教育活動においても試行錯誤しながらの日々を送ることとなった。そこで本文では派遣先での実践だけでなく、渡独前の思いや帰国後に考えることも含めて紹介したいと考える。

2. 渡独前の思い

ドイツへの派遣が決まり、当初私が意識して取り組みたいと考えたことを以下に紹介する。今回の日本人学校派遣にあたり、新学習指導要領の内容について十分に理解し、「在外教育施設の教育の質の向上」「積極的なグローバル経験豊富な子どもたちの育成」という観点から、子どもたちのために質の高い授業実践をすることは最も大切なことであると考えた。日本でも同様だが、しっかり教えしっかり引き出す授業展開を行うことは、海外では特に重要であると考えた。長期滞在の子どもには、正しい日本語や読み書きを教えることは必須であり、短期滞在の子どもにとって、子どもたち同士の関わりや帰国してからの進学も意識しなければならぬ。教師として、児童生徒を広い視野で理解し、実態に応じた適切な指導をする必要がある。そのため派遣中は主に以下のような対策、取り組みを考えている。

(1) 学び合いを大切にしたい授業展開

教師がしっかり教えること、子どもたち同士での対話的な学びを意識した授業実践を目指す。そのために、毎時間のめあての明確化を図り、振り返りをしっかりと行う。

(2) スタートカリキュラムの実践

幼稚園と小学校1年生のつなぎを意識することで、幼児期に身に付けてきたものを生かし、発揮できるようなカリキュラム作成を行い、職員同士の共通理解を図る。

(3) ドイツの音楽と日本の音楽とを結び付けた授業計画

派遣先のドイツは、クラシック音楽の歴史があり、有名な作曲家も多数輩出している。現地の音楽教育の視察や授業交流を進んで行うとともに、学校教育以外に、自分自身が積極的に地元の音楽に触れたり体

験したりする機会をもちたい。また、これまでにお箏での音楽づくりや篠笛演奏、日本の歌を通して教育実践してきたことを派遣先でも実践し、我が国の音楽の充実を図りたい。さらに、これらの体験や活動を総合的に比較し、相違点を探ることで、新たな授業計画を模索する。

(4) 道徳教育の充実

前任校で研究した道徳の授業展開から、視覚的な教材を用いて、子どもたちが自分の事として考えられるような教材の工夫を行う。そうすることで、様々な人々がともに生活していることを意識し、国内外でも通用する道徳的価値の高い子どもを育てたい。

(5) 職員、保護者との連携

各地から集まる教師集団の中で、協調性、柔軟性をもって接することは大切である。また今まで同様、保護者との共通理解を深めるために、一つひとつの対応を丁寧に行う。

3. 実践報告

前述の「2. 渡独前の思い」にも触れながら、教育実践を報告する。

(1) スタートカリキュラムと学び合いの実践

派遣1年目は小学1年生の担任となった。日本人学校のカリキュラムを尊重しながら、前任校で取り組んだスタートカリキュラムをできるだけ意識して授業実践を行った。日本人幼稚園に通っていた児童も多いが、ドイツ人の指導のもとドイツの子どもたちとともに教育を受けてきた児童もいる。そのため日本語を正しく丁寧に遣い、具体的な指示を心掛ける必要があった。

またどの教科・領域においても、ペアやグループで問題解決できるような学習課題を設定した。学校全体でも「学び合い」を意識した授業作りを目指していたため、学年やブロックで情報交換をしながら授業計画を進めた。始めのうちは上手く話せなくても、友達の考えを取り入れ真似して話してみたり、慣れてきたら自分の言葉で説明したりするなど、毎時間意図的に友達とともに考える時間を設定することで自然と学び合おうとする力が付いたように思う。ドイツで生活する子どもたちにとって日本語を使うのは、家族や学校生活内に限られることが多い。在外教育施設において、正しい日本語をしっかりと教えるとともに、友達とのコミュニケーションを意図的に図る機会を設定することは重要である。

(2) 音楽に関わる教育実践と体験

①日本人学校での音楽行事

ベンラート城にて現地校と本校の児童生徒の音楽交流会が行われた。児童生徒の中には、ピアノやバイオリンなどを習っている子が多く、自分の得意分野で演奏披露した。また現地校の子どもたちは、個人的に習っているピアノやギター、授業で取り組んだ合唱や弦楽アンサンブルなどが披露された。互いの演奏を聴き合うことを通して、演奏のよさを認め合う雰囲気が見られた。またデュッセルドルフ復活教会での鑑賞会では、声楽家やドイツの教会オルガニストによる演奏を全校児童生徒で聴くことができた。約1時間の演奏会であったが、教会ならではの厚い響きに包まれながら子どもたちは音楽を体全体で感じ取ることができた。さらにクリスマスの時期には、毎年小学2、3年生を中心にクリスマスマーケット内のステージで、ドイツ語でクリスマスソングを歌う機会をいただいている。日本でも親しまれているクリスマスの歌をドイツ語で歌う経験は、多くのドイツの方々にも聴いていただき、子どもたちにとっては大変良い機会であった。

②Ce 校ギムナジウムでの授業参観

日本人学校から徒歩5分にあるギムナジウム（日本でいう小学5年生から高校3年生までが通う学校）で、英語、フランス語、音楽、体育の授業を参観した。音楽の授業では、普段は楽器演奏や歌を歌うこともあると聞いたが、参観した授業では人気のポップソングを聴いて、自分の感じたことを伝える授業であった。鑑賞と

いうと、日本ではクラシック音楽を中心に、聴き取ったことや感じ取ったことについてまとめていく方法を取るのが一般的であるが、誰もが知っている流行りの曲を基にして自分の考えを思うままに発信する方法が取られていた。他教科でも感じたことだが、講義型の授業の中にも自分の考えを伝え合う時間を多く取っていることが印象に残った。教師はある意見に対しすぐに反応せず、子ども同士で意見を繋げていくことを重要視されているようだ。

③Japan Tag（日本デー）での取り組み

日本デーは、デュッセルドルフのライン川の畔で毎年5月頃に開催される日本文化を紹介するイベントである。毎年100万人規模の集客があるとされ、イベントの最後は日本人花火師による花火が打ち上げられる。また日本食の屋台や折り紙、生け花、書道、箏、相撲、柔道など様々な日本文化の紹介をする。本校も毎年、国際交流委員会、合唱部、ウインドアンサンブル部が参加している。

私は中学生が所属するウインドアンサンブル部の顧問であり、大きな野外ステージでの演奏に向けて放課後や日曜日に練習を重ねた。当日は日本クラブのオーケストラのメンバーとともに「スーパーマリオブラザーズ」や「八木節」、日本で話題になっている曲などを披露した。ステージの前には多くの観客が声援を送ってくれ、日本の曲を楽しんで聴いてもらうことができた。

④メアブッシュ市の女声合唱団の体験を通して

派遣2年目に入る頃、自宅近くの教会で行われている合唱団の練習を覗きに行った。流暢なドイツ語で意思疎通を図ることは私にとって難しいが、「音楽は世界共通！」と思い切って門戸を叩いた。その時、偶然にも日本語の歌の練習をしている最中で、その場で楽譜を渡され仲間に入れてもらった。日本の文化を紹介する「さくら祭り」がメアブッシュ市で開催されることが決まり、団員は日本の歌を発表するために練習していた。そこにとっても縁を感じた。

合唱団員の年齢層は40代後半から85歳位までで、週に一度の練習を楽しんでいる様子であった。基礎的な発声練習を行ったあとは、何曲もの歌を歌い続ける。細かい音高の違いやハーモニーを意識させることはあるが、とにかく楽しく歌おうというスタンスである。指導者は団員を飽きさせないよう、歌声や響きのよさを認め、次々に歌う曲を変え、楽しませながら歌わせている。それを毎週続けることで、自然と曲が仕上がっていく。自分が指導者だったら、音やリズムが揃わないところを指摘し、何度もやり直しそうであるが、指導者の心の広さや音楽に対する余裕など学ぶことが多かった。また練習後は、誕生月の団員が好きな歌をリクエストし、皆でその歌を歌って祝福する。ドイツでは、誕生日を大切にし、盛大に祝う習慣があるようだ。その温かい雰囲気も合唱団のよいところだと思う。誰もが1年に1回主役になることができる。

ドイツでの生涯学習教育について調べてみると、主な成人教育機関・団体としては、Volkshochschule、教会、労働組合、商工会議所、地方の学習グループなどがある。プログラムを覗いてみると、多言語学習、音楽、文化、健康等内容が充実している。他にも、ヨガや水泳、ダンスやコミュニケーションのためのイベントなど様々である。ドイツでは「歳だからできない」とネガティブな考えはなく、年齢に関係なく「自分がやりたいものを楽しんでやる」という意欲を感じた。見習いたい。

(3) 道徳教育

ドイツ社会で生活する中で、在外教育施設での道徳教育はとても重要であると感じた。子どもから「ドイツでは〇〇だけど、日本ではどうなのかな」という疑問が出ることも多くあった。道徳の教材はドイツでのルールと異なる点も多々あり、「日本では、〇〇だよ」と状況を説明した上で、自分の考えをもたせなくてはならない場面もあり、道徳的価値に迫るために授業時間が足りないこともあった。ドイツの実態を把握した上で、広い視野をもった道徳教育を行わなければいけないと改めて考えさせられた。

(4) コロナ禍での学校教育

2020年3月にロックダウンとなり、4月から学校閉鎖となった。夏休みまでに徐々に分散登校ができるようになり、担当した5年生は1学期に8日登校することができた。2学期は対面授業が許され80日間登校できたが、再びロックダウンとなり3学期は全てオンラインでの授業となった。4月当初はプリント課題を配付し、その後はオンラインでの課題配信に日々追われた。オンラインだと子どもたちの表情が読み取れなかったり、友達同士のコミュニケーションが上手く図れなかったりと目指す授業展開をすることが難しいこともあったが、子どもたちは機器の操作に早く慣れ、自分の考えをチャットで示したり、分かった時には大きく頷いたり手でサインしたりするなど前向きに学習しようとする姿勢が見られた。慣れない授業形態に戸惑うことも多かったが、家庭での協力も得ながらコロナ禍の1年を過ごすことができたように思う。

4. 帰国後に考えること

コロナ禍にあり、強制隔離や自主待機期間を乗り切らなくてはならない帰国となった。振り返ってみると、渡独前の思いを実行することができた喜びもあれば、残りの1年でもっと掘り下げたかったこともあり正直心残りである。派遣3年目は学校行事や現地校との交流、当たり前であった対面での授業でさえも制限され葛藤する日々であった。コロナ禍をきっかけに学校教育の在り方を改めて考えさせられた。文科省による「令和の日本型学校教育」にも示されているように、学級や学年、学校全体を見通す力に加え、オンライン授業などによるICT活用力、授業を行う上でのさらなる専門性が必要になってきた。環境が変われば授業形態も変える必要がある。1年の半分近くオンラインでの課題作りや授業を行い、教員の意識や価値観は今までと同じではないと強く感じる。

またドイツの音楽においては、コロナ禍でもバルコニーで音楽を奏でる人がいたり、条件を考慮しながらコンサートを再開したりする州もあった。人々が音楽を心から楽しみ音楽文化を大切にしている様子も実体験を通して感じ、芸術文化の素晴らしさを再認識した。一方、コロナ禍での学校音楽教育活動には多くの制限があり困難な状況が続いている。そのような中でも人の感情を大きく動かすことのできる音楽は、いま最も大切ではないか。音楽の楽しさや素晴らしさ、喜びを味わえるような授業展開を今後さらに工夫していきたいと考える。

さらにドイツの学校で実践されていた考えや感じたことを友達に伝える力、合唱団での体験を通して学んだ個々の主張と協調性を大切にする意識、寛容な心での指導方法、コミュニケーションのための言語習得（英語学習の充実）など参考にしたいことは多くあった。新学習指導要領の実施に伴い、考えをもち伝える力を付けることが今まで以上に重要視されている。しかし「考えをもつ」ということは「考えをもたせる」ための手立てを明確にしなくてはならない。「伝える力」を身に付けることは大切であるが「伝えたい」と思うようにさせなければならない。私自身、「もっと知りたい、関わりたい、体験したい、思いを伝えたい」という気持ちもち続けることができた結果、ドイツの生活は充実していたと振り返ることができるのだろう。今後も日本の学校教育の現状を把握するとともに、在外教育施設派遣での経験を生かしながら授業実践を進めたいと考える。